

第1表

1963年の日本側さけ・ます漁獲実績

漁業種類	漁獲量 (単位トン)	魚種別組成 (%)				
		へびさけ	しろさけ	ます	ぎんさけ	ますのすけ
母船式流の網	46,269	41.3	26.2	20.7	11.3	0.5
48度以南流し網	49,211	+	28.5	62.1	8.6	0.8
太平洋はえなわ	20,207	+	17.6	82.2	0.1	0.1
日本海流し網	4,708	-	-	100	-	-
沿岸(1月~9月分)	15,338	+	35.0	65.0	+	+

5. 今年度・北洋漁場に於ける漁海況の特徴

広瀬 寛(日魯漁業株式会社)

(1) ブリストル系紅の出現がまばらであった。

ブリストル系紅は38年度は豊漁年の主群42.52群卓越せず37年度の20~40%増程度この予想であったが、本年度は海況の変化によつてであろうが、非常に魚群の出現がまばらであり、漁場に安定性が見られず、信濃丸の場合操業日数僅かに6日間にて104.105区の操業を打切つた。猶喜山丸は5日間操業したが明晴丸、協宝丸は操業していない。

(2) 紅鮭漁獲対象群の年令組成に 5<sub>2</sub> 群が比較的多かった。

本年度出漁前の漁況予想によると 1958 年度生れの 5 年群は豊度低し 1957 年生れの 6 年群が豊度が高いとの事であったが、本年の特徴としては 53°N 以南漁場で 5<sub>2</sub> 年群が予想に反し比較的高い比率を示した。

更に 53°N 以南海区操業を通じ 5<sub>2</sub> 群は 5<sub>3</sub> 群よりも常に高い比率を示し西カム系紅が予想外に不振であったと判断される。

然しこれはあく迄日魯船団の漁獲対象群についての年令組成であり漁獲されなかった群については全く未知数であるが、斯様な現象より判断すると本年度日魯船団紅鮭漁獲対象群の東カム系の比率は従来考えられていた比率を大巾に上廻るものと思われる。

本年度は 37 年度末頃からカムチャッカ北部が非常に高温であったこと、37 年度夏季の間にカムチャッカより北西太平洋向け卓越する季節風による水塊の冷され方が少なかったためか、48~50°N 165°E 付近に例年残っている冷水塊も大分西へ移行し操業漁場一面に高温水帯が広がっていた様である。その為か本年度は初期漁場が西へ偏り海況気象の原因で恐らく初期に漁獲せる魚群の前にもう一つ大きな魚群が通り過ぎていたのではないかと想像される。

(3) 白鮭は 4 才魚が圧倒的に多かった。

本年度出漁前の自鮭来游予想は 4 才魚が主体となり 5、6 才魚は早い時期に沿岸に多く 3 才魚は後半に多い。又量的には極端な不漁ではなく中漁程度と思われるとの事であった。

本年度漁獲対象群の年令組成を見ると予想にたがわず 4 才魚が圧倒的に多く全漁期を通じ 70% 程度を占めている。

#### (4) 鱒の好漁

本年度は予想外に早くから来遊し既に5月下旬～6月上旬南西海域で全体の30～40%程度を漁獲した。(信濃丸)。又6月中下旬アツツ西方でかなり鱒群が見られアリューション海域は予想通り鱒の豊漁型であった。然しオリュートルカラギンについては当初かなり高い豊度と思われたが結果的には沖合に於ては白鮭に比し可成り少い漁獲であった。これから考えれば、魚群の沖合通過が可成り早かったとも判断される。

#### (5) 銀鮭の豊漁

39年度は38年度に引続き銀鮭は比較的好漁であり可成り高い豊度を示した。本年度は各船団共南方銀漁場で銀を漁獲し満も切揚げたが、本年度漁況から判断しても若し仮りに切揚げることなく引続き漁獲したならば、未だ相当量の水揚げがあったものと想像される。

### 6. 1963年北洋さけ・ます漁業に於ける漁・海況の1～2の特徴について

吉原英吉(日本水産株式会社)

本年度の漁海況については既に詳しい説明があったので、ここでは宮島丸船団の操業から見た本年度の1～2の特徴について簡単にのべる。

#### (1) 気 象

昨年秋からの北半球に於ける異常気象の影響が尾を引いて、本年は全漁期間を通じて例年になく天候が不安定であり、時化が多かった。特に操業当初から5月末にかけては、カムチャッカ、千島付近に顕著な気圧の谷が存在し、大陸からの寒気の氾濫が多く、漁場は相次ぐ低気圧の接近発達に